
バイオハザード ～乱入物語～

ネビル中尉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオハザード ～乱入物語～

【Nコード】

N5467M

【作者名】

ネビル中尉

【あらすじ】

バイオハザードが好きな中学生達があるゲームカセットを拾った瞬間、“バイオ”の世界に乱入してしまった…。慣れない体、知っているつもりでも知らない場所で戦う彼等はどう生き伸びるのか？なぜ彼等が連れてこられたのか？全ての事件を解決した時、答えは明かされる。成長盛りの中学生達のサバイバルホラー&恋愛コメディーここに参上！

『謎のゲーム』(前書き)

登場人物

田中 隆太(クリス?レッドフィールド) 十三歳で中学生。かなりのバイオ好きでキャラクターはクリスが一番好きである。

大西 真治(レオン?S?ケネディ)

同じく十三歳で中学生。バイオ好き。レオンが一番好きである。

他にもいろんな人がです。お楽しみに!

謎のゲーム

俺はクリス？レッドフィールド。

というのは嘘で田中隆太、13歳だ。偉大なる会社“カコン”が出している「バイオハザード」が好きで日々三時間はお勤めしている。

中学校ではちよつと馬鹿な方でルックスは中の上というのが友達の話だ。もちろん休み時間はバイオオンリー。攻略の仕方について数人の友達と語り合う。

そんな世間などまったく気にしていない俺が学校から帰ろうとした時だった。

田んぼ道に見慣れないゲームカセットが落ちている。

見れば題名は

「バイオハザードX」

とかかれていた。

なんや？、と思いつつもカセットがWiiのものなのでありがたくもらうことにした。

「ただいま！」

と叫んで家に飛び入り、俺は自分の部屋へ乱入。

即座に着替え、友達を呼んでバイオやる気満々モード。

早速スイッチを入れてはじめる。

なぜかオープニングムービーは全シリーズのものが入っていた。

「ほな、地獄へ招待するで〜。」

とふざけて言いニューゲームを選択した。

直後、俺と友達の視界が闇に包まれた・・・。

「うつう。」

俺はやたらに寝苦しさを感じて目を覚ました。
誰かの家だろうか？

すごく整理されていてキレイな空間だ。
不思議に思いつつ俺は辺りを見渡した。

机の上にクリスとクレアの写真が置いてあるのも気になったがそれ
以前に床に私服姿のレオンが寝ていたのにはびびった。

「ええええええええ！？」

妙に低い声だったがそんなことは意に介さず駆け寄った。
レオンを起こす。

起き上がったと思うと今度はレオンが「ええええええええ！？」

と言ってきた。

「本物だ！」

と俺達は言い合つと即座にお互いの差しあっている指の先が気にな
った。

どういうことやねん？

と思いながら二人して部屋に置いている鏡を見る。

だがそこにいんのはどっからどう見ても本物のクリスとレオンだっ
た。

服はそのままやけどな・・・。

「お前、真治やんな？」

とクリス。

「うん。お前は隆太か？」

とレオン。

「そうや。」

どうやらなんかの都合でバイオハザードの登場人物になってしまっ
たようだ。

真治がレオンで俺がクリス。

これはなかなかヤバいな。

「と、とりあえず服着ようや。ここ、俺ん家らしいしなんかあるや
ろ・・・。」そう、俺らは服がそのままなのでムキムキの俺らの体

には小さ過ぎた。

一種の変態みたいだ。

クローゼットに行き適当に服を着替えた。

俺は、今日はもう勤務時間も終わった（現在pm8:00）みたいなので白のＴシャツにジーパン。

レオン、いや真治にはいろんな色のＴシャツやジーパンを何着かあげた。

「はよしやなクレア帰って来るで。どこ行ってるのか知らんけど今会うのはヤバいで。」

俺がそう言つとレオンはクスクス笑った。

「いやゝ今更やけどさ、関西弁のクリスとレオンで・・・くくくつ（笑）」

「阿呆！そんなんでもいいねん。今1995年や。俺はラクーン市警のSWATで頑張ってるようやけどお前フリーターやる？住んでる家分からへんのやつたら警察学校行つて寮借りる。ええな？」
ととりあえず現状から考えて一番いい案を言ってみた。

「わかった・・・。」

真治はしぶしぶ了解した。

「2やったからレオンの事はだいたいわかるやろ。頑張つてなりすましや。」

真治はその声に手を挙げて答え、去って行った。

数分後、レオンと入れ違いでクレアが帰って来た。

「ただいま。」

「お帰り。」

なんと言つたらいいかわからずボソツとつぶやいた。
するとクレアが心配そうに

「どうしたのクリス？調子が悪いの？」
と聞いてきた。

「い、いや、そんな事はないさ。ちょっと仕事で疲れたただけだ・・・。」

「そう？」

なんとなくギクシャクした会話が続いた後、俺はソファーに座った。
「先に寝る事にするよ。お休みクレア。」

「あら、せっかくマクドナルドのハンバーガー買って来たのに。まあいいわ。お休み兄さん。」

そう言っただけでクレアは部屋をでていった。

階段を登る音が聞こえる。

「はあーあ、どうやって元に戻るんや……。」「
ソファーに横たわる。」

慣れへん標準語やゲームで見るより美人なクレア、そして何よりこの体を相手にして俺はめっちゃ疲れたんですけど。

“これからどうしよう？真治追い出してもうたしな……。”

俺はめっちゃ後悔していた。

こうして、俺と真治、その他後から来る友達達のバイオ才生活が始まった……。

ゝ謎のゲームゝ（後書き）

アドバイス、感想よろしくお願いします（^^）

ゝ初めてのお勤めゝ（前書き）

隆太君警察デビューです。

イエー！

く初めてのお勤めく

翌朝、現在 a m 7 : 3 0 。

俺はぐっすり寝てた訳ですよ．．．。

そしたらクレアに叩き起こされました。

「クリス！いつまで寝てんの。8 : 0 0 時から仕事でしょう？」

「そんなの車ぶっ飛ばしたらすぐだろう．．．zzz。」

と返す。眠たいしね。

そしたらクレアは呆れた顔で言いました。

「車なんか持つてないでしょ。いっつも自転車飛ばして警察署まで行ってるじゃない。やっぱり昨日から具合悪いのね．．．。」

なにいいいい！！

“ 車持つてないだとおおお！”

思わず叫びます。俺。（心の中でな）

急いで飛び起き、ベーコン付きトーストを胃に放り投げ、制服に着替える。S T A R S はまだできてないからただの制服警官姿だ。違和感あるね、この姿。

「無理しない方がいいわよ。それじゃあ高校に行つてきまゝす。」
そう言い、さつさと家を出て行くクレア。

“ え、高校？” “ ああ、そうか。”

今1995年だから2の時の19から3引いたら16だ。”

一人で納得。

つてそんな事してる場合ちゃうやん！自転車！自転車！

確かにクレアの言った通りありました。

車庫に（自転車庫かな？これは．．．。）

でも鍵がない！時間もない！！

現在7 : 4 0 。

ヤバいぞ、走れ俺！

「うおおおお！！！」

家の前の坂をかけ、ビル群を抜け、交差点を走り抜けます。周囲の視線なんか気にするか。

というのが俺流。

でもやっぱり駄目でしたね。

途中俺と反対方向に走っていくウエスカー（グラサン）の車を目撃。こっち見てすごい形相してました。

どうやら警察署とは真反対に走っていたようだ。

7：45分、もう間に合わねえな。

と思った時に救世主降臨。

「・・・クリス、どこに行こうとしてるの？」

ジルだな、あれは。

「いやあ、あれがこれでこういうことで・・・。」

警察署の場所がわからなかった、とはとても言えない。

「どういう事よ。まあいいわ。訳ありのようだから警察署まで乗せて行つてあげる。」

「Yes！」

思いつきり叫んでしまった。

「あら、そんなに嬉しかった？」

といい彼女は俺を車に招き入れた。

BMWだ。

俺が入ると同時にジルはものすげえスピードで走り出した。

「Wait！wait，please！！！」

「自転車の方が良かったかしら！」

ほぼノーブレーキでラークン市警に到着。

体験したことのないスピードに軽いめまいが・・・っとそこは耐えます男クリス。

ジルと共に玄関の扉を開けるとあの特徴的なホールが目の前に。見知らぬ警官達と適当に挨拶をかわしつつ、SWATオフィスへ向

かう。（どうやら西側オフィスがつかわれてるらしい。

扉を開けるとグラサン、バリー、がお出迎え。

ジルの時もあったがこうして本物を見ると意外と迫力がある。

「クリス！ちよつとこいよ。」

いきなりバリーに呼ばれました。

「この銃を見てくれ。今日届いたんだ。」

そういつてバリーが俺に見せたのはシルバーに光るギンギンの35
7マグナム。

この世界を知らない俺でも、銃に関しては一人前だ。

その点では前クリスを抜いているだろう。

「すごいじゃないか！ハンマーは引きやすいように延長され、銃身
周囲を空洞化し放熱効果を上げている。」

その上安全装置が左右に付いていて両手で扱えるな。」

俺の相づちに満足したのかバリーの顔は自信に満ち溢れている。

俺も満足。

ジルは“さつぱり”といった顔だ。

そんなたわいない？話を続けてたら署内放送。

どうやら銀行強盗のようやな。

急にグラサンの顔が厳しくなります

ブリーフィングが始まりました。

初めての任務やから何をしたらええんかな？

「全員、注目。」

“さあ、いったい俺はどうすればいいんだウェスカー？”

ゝ初めてのお勤めゝ（後書き）

アドバイス、感想よろしく！

ゝ銀行強盗制圧！ゝ（前書き）

今回はギャグだけでなく、恋愛的な要素も含まれています（^^）
レオン編（真治編）はもう少しお待ちください。

「銀行強盗制圧！」

「ええ8：10分現在、ジョイセフストリートに接する銀行で強盗が銃を所持し、立てこもっている。現場は既に制服組が包囲しているが突入の目処は立っていない。よって我々SWATが出動する。」

「了解！」

と10名の隊員達。

俺も慌てて返事しますとも。

「了、了解・・・。」

これまた元氣のないような返事だったらしく隣りに座っているジルとバリーに体調の不具合と勘違いされた。

“俺は元氣だつて。”

そうこうしている内にみんな地下駐車場へ向かい始めました。

護送車で行くようですな。

俺もさっそく乗り込みますよ、はい。10名全員が乗り込むとグラサン登場。狭い車内を更に狭くしゃがります。

「たった今、現場の状況が変わった。制服組の馬鹿な行動で銃撃戦が始まった。人質は全員逃げたようだが・・・。クリス、お前は狙撃チームの援護でビルの中に突入してくれ。ジル、バリーはクリスの援護を。私は他の者を連れて裏口から突入する。」

そう言い終わると同時に護送車は走り出した。

“俺先陣きるの、PMポイントマンだからか？そんなん絶対無理やで！”

そうこう考えている内にとうとう銀行に到着。

後ろの扉を開けて素早く展開。

3のオーブニングムービーを思い出します。

30m先にはビルが見えます。

強盗犯は三階に集中しているようだな。

窓からは5つのマズルフラッシュが見えます。

20人からなる“制服組”がショットガンやベレッタなどで応戦しています。歯が立っていないようです。

なんせ向こうはM4やAK、SPASUまで持って錯乱していますから。

アメリカって怖えええええ！

「こちら狙撃班、位置についた。指示を。」

「制圧射撃を開始せよ。威嚇だけでいい。」

エンリコとウェスカーの無線会話だ・・・。

エンリコさん同じ部隊だったんだね。みんなフェイスマスクしてるからわからなかった。（俺、バリー、ジル、グラサンはしてないけどな。）

狙撃班の射撃が始まりました。

途端に飛んで来る銃弾の数が減ります。

今だ！と感じた俺は走り出しますとも。

“そうだ、俺が今までコールブデューティーでつちかってきた戦鬨の勳をここで使おう！”

狙撃班の援護を受けて俺、ジル、バリーは無事に進入。

俺を先頭にカウンターを抜けて階段を上ります。

しばらく二階を歩くといきなりドアからAK持った覆面野郎が飛び出してきました。

クリス（俺）アドレナリン全開です。

素早くMP5の銃弾を馬鹿みたいに横走りしている覆面野郎の足元に送り込みむ。

Oh, no!

敵さんボタンきゅー。

素早く駆け寄り、銃を蹴飛ばし、手錠をかける。

にしてもジルさんあなた怖いんだね。よほどびっくりして腹が立たんでしょう。

覆面野郎の撃たれた足をふんずけてました。

「Stop! Stop! I'm sorry... (。|。)」

あまりに可哀想だったのでバリーに救急車まで運ばせました。

とうとう三階です。

どうやらこの扉の向こうにいるみたいですね。

銃声が聞こえます。

さあ腕の見せ所、と取り出したのは閃光手榴弾。

洋館で使えたアイテムだ。(本来はディフェンス用なので使えるのかな?)

「いくぞ、ジル。」

「ええ。」

ガチャ、コロコロコロ...

ピカーン!

と激しい音と共に突入、意外に音でかいんだなこれ。

めちゃくちゃびびったよ...

4人中三人が既に気絶していました。最後の一人は俺がナイフで銃を切断し、ジルが急所に蹴りを入れてノックダウン。

めっちゃ痛そう。

全員を行動不能にするとジルは窓から発煙筒を投げました。

オールグリーンの合図らしいね。

やっと終わったと思いきや安堵の息を吐く。

...って、ん?

気絶体、一人減ってね?

気づいた時にはもうすでに遅し...

ハンドガンでジルの後頭部を狙ってました。

「させるか!」

ジルを突き飛ばす。

直後、俺の右胸に着弾、赤い液体が滴った。

男はそれで力尽きたのかドサツと崩れおちた。

俺も崩れ落ちる。

「クリス！そんな．．．。」

ジルが駆け寄ってきます。

その頬には一筋の光が．．．。

「ごめんなさい。私が、私が油断してたから．．．。」

「．．．．．泣く．．．なよジル．．．女に涙は．．．似合わないぜ．．．。」

段々視界が狭くなってくる。

痛みももう殆ど感じない。

「死んじや駄目よ！クリス！生きて！」

「．．．死ぬか．．．よ。まだ．．．言っていないことがあるんだ．．．」

「何？」

「君が．．．好きだったぜ．．．」

「（？　　？）！？」

最後に言い残して俺はノックダウン．．．。

ジルに言った言葉の返答も待たずに一人生死をさまよった．．．。

「銀行強盗制圧！」（後書き）

クリスが救急車に運ばれました．．．。

「うう．．．。」

明るい色のベッドルームに眩しさを覚え、俺は起きた。

「クリス！よかった。」

ジルの声だ。

「ここは？」

と飛び起きた。

「うつ！．．．いてて。」

「駄目よ、寝てなくちゃ。全治3ヶ月よ。」

ああ、そうか。

撃たれたんだ、俺。

絶対死んだって思ったのに。

いや、今死んだら洋館事件どうなんだ？

つまり俺死ぬ訳無い．．．。

「ごめんなさい、私のせいで．．．。でもさっきの言葉は嬉しかった。ありがとう。」

そう言っていると彼女は俺にキスして出て行った。

「また来るわ。」

そのキスは甘く、しかしほろ苦かった．．．。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5467m/>

バイオハザード ～乱入物語～

2010年10月8日14時04分発行